

平成二十一年四月二十五日(土)

第三九〇回 史跡めぐり

# 植木の里・安行と

## 伊奈家の足跡を訪ねる

NPO 法人 越谷市郷土研究会

第三九〇回 史跡めぐり

植木の里・安行と

伊奈家の足跡を訪ねる

● 日 時 平成二十一年四月二十五日（土）

● 集 合 JR 南越谷駅前（りそな銀行前）午前八時三十分

● 参 加 費 一、九〇〇円 \*弁当持参

（交通費・資料代・保険料を含む）

● 案 内 者 理事 篠原陸郎

コース（歩行約7.5キロ）

（武藏野線） 南越谷駅  
東川口駅  
(埼玉高速鉄道) 東川口駅  
戸塚安行駅

<15分>

西福寺

<25分>

赤山陣屋

<25分>

花と緑の振興センター・昼食

<10分>

興禅院

<20分>

金剛寺

<35分>

源長寺

<10分>

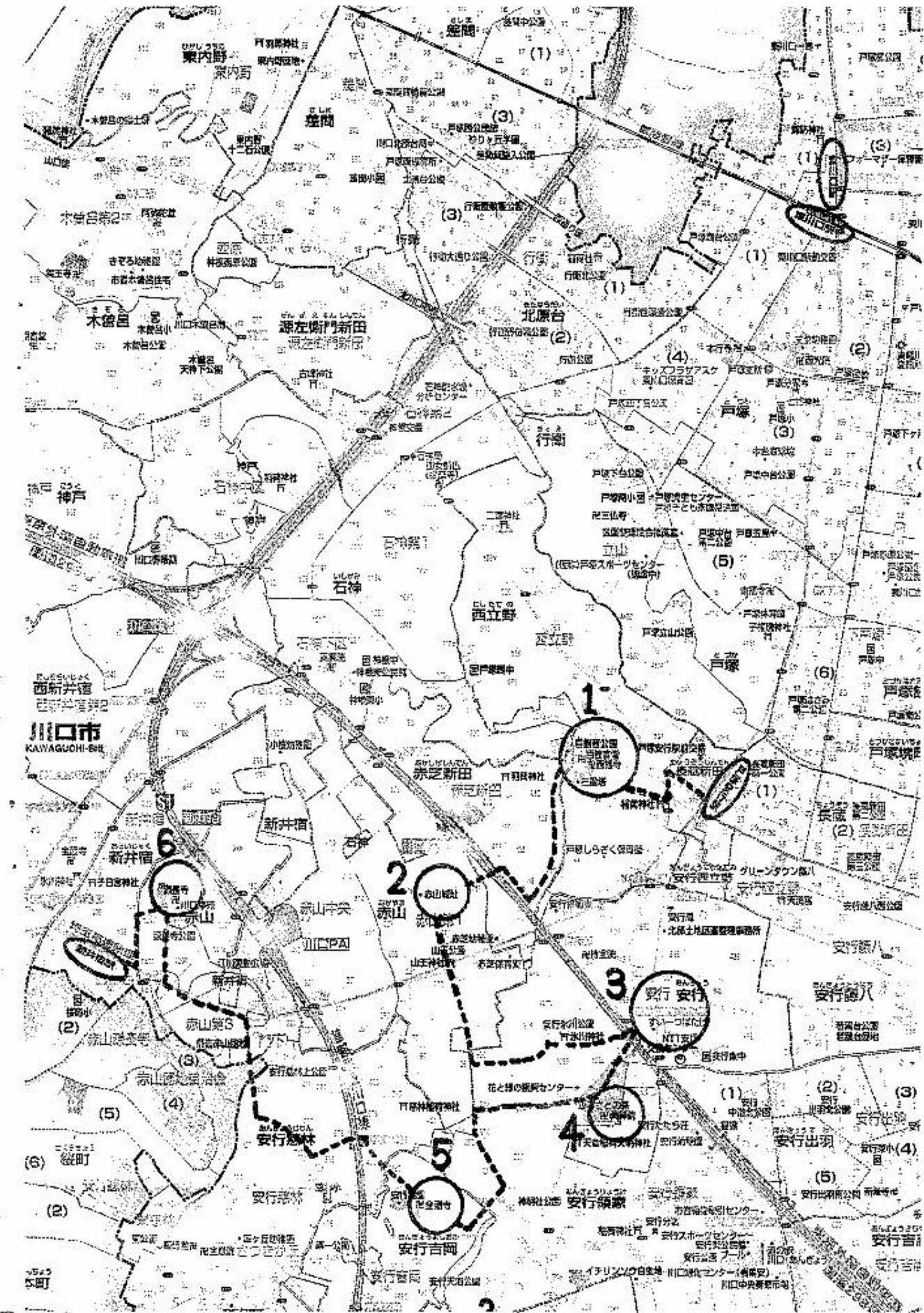
(埼玉高速鉄道) 新井宿駅

解散（約午後4時）

「神様・仏様・伊奈様」

の陣屋内





## ●安行の植木

川口市の安行地区を中心として、鳩ヶ谷・浦和・大宮に及ぶ台地は安行の植木地帯として知られている。

その歴史は今から三百五十年前、安行村の吉田権之丞によって始められたと伝えられている。

明暦三年（一六五七）振袖火事の後、植木・花木を出荷して大当たりをしたことを契機として、近隣の農家に栽培が広まつた。

この地方の地形が台地・傾斜地・低地が入り組んでるので、それぞれに適する植木・花木を栽培することができ、土質も関東ローム層で植木・花木の生育によく適しているなどの自然条件のほか、農家の人々の弛まぬ努力や江戸という消費地を控えた地の利も恵まれていたからである。

現在も今なお「安行の植木」と云えば、全国は元より海外まで知られ、今日川口を代表する地場産業の一つとして発展している。



植木まつり



## 西福寺

### ○西福寺

- ・真言宗豊山派の寺（總本山＝奈良長谷寺）で山号を補陀落山という。弘仁年間（八一〇～八二四）に弘法大師が國家鎮護のため創建したと伝えられる古刹。
- ・西福寺の近くを日光御成街道が通じていたことから、江戸期になつて参詣者が増え徳川家の帰依と信仰を集めていた。



正面・觀音堂

### ○百觀音信仰

- ・觀音堂の本尊である如意輪觀音の胎内には、西国・坂東・秩父あわせて百ヶ所の札所の觀音像が納められており、この御堂に参詣することで百ヶ所の札所をめぐつたと同じ御利益があるとされる。

・「新編武藏風土記稿」には、觀音堂の再興は元禄三年（一六九〇）と記されている。

- ・また堂内には、三重塔と同じく三代将軍家光の娘千代姫から寄進された金箔押しの九十九体の觀音像が本尊の両脇に安置されている。本当の百觀音は本尊の胎内仏であり、像内に納入物を納める違例としても貴重なものである。
- ・毎年八月九日の大護摩の日には、御本尊が開帳され現在でも多くの参詣者が訪れる。

### ○三重塔

- ・三代将軍家光の長女千代姫が奉獻したもので高さ約二十三メートルあり、県下では一番高い木造の建造物である。棟札銘文によると、この塔は元禄六年（一六九三）に建立されたもので、

### ○四等三角点

- ・国土地理院の三角点があり、国の高さの基準でJP（東京湾中等潮位＝海拔）17.5mとなつていて。

### ○荒神信仰

- （荒神社内）屋敷神・同族神・部落神の地荒神

- かつては檜を組んで塔の頂上まで参詣者に登らせた時もあつたが、現在では廃止されている。
- ・塔は鉄製の釘を一本も使わず細工によって作りあげてあり、構造は方三間で、一層の天井から真上に一本の柱をたて、その柱から二層、三層の屋根に梁を渡しバランスをとつて、風にも地震にも耐えられるように工夫されている。



三重塔

## ● 関東郡代伊奈氏

### ○ 郡代

- ・代官の頭取で身分・格式は代官よりも上であるが、職務内容は代官とほぼ同じ。

- ・支配地 ト万石以下＝代官 以上＝郡代（関東郡代約三十万石）
- ・職務 御料の行政・裁判・年貢徵収・警察権・鷹場管理など
- ・代官の数（天保十年＝一八三九）
  - 郡代（四） 関東郡代・西国郡代・美濃郡代・飛騨郡代
  - 代官（三十二） 筏頭格 萬山代官所（江川太郎左衛門）

### ○ 関東郡代伊奈氏

・**関東郡代伊奈氏**は、初代伊奈備前守忠次が徳川家康の厚い信頼を受けて以来、世襲代官として約二百年十一代にわたり、関東の幕領百万石の内の約三十万石を支配する篠頭代官の地位にあつた。

・**伊奈氏**のこの支配地高は、他の幕府代官のそれと比較して郡を抜くものであり、この広大な支配地を治めるに当たって、赤山の陣屋に沢山の家臣団を抱え、様々な財政・インフラ・民政に多大な業績をあげた。

・自らは江戸馬喰町の屋敷に家老と居を構え、事業の指示や公儀の通達を赤山陣屋に指示した。

### 越ヶ谷領までの「触書」の伝達例

- 幕府（勘定奉行）→馬喰町屋敷→小菅陣屋→赤山陣屋（支配人会田家）→郷手代衆（大間野中村家）  
↓用元・名主

### 日本の石高（元禄検地の頃）

- ・全体 約 2,900 万石
- ・御料 約 400 万石（内関東約 100 万石）
- ・私領 約 2,500 万石（内旗本領約 300 万石）
- ・禁裏・公家領 約 10 万石
- ・寺社領 約 40 万石

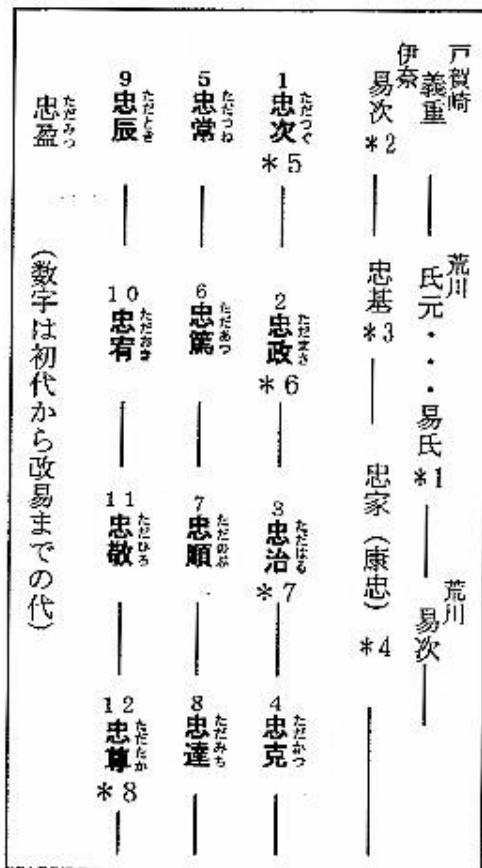
### 越ヶ谷領の石高（江戸後期）

- ・全体 約 31,300 石
- ・御料 約 21,500 石（伊奈氏改易後 2 人の代官支配）
- ・私領 約 7,400 石（岩槻藩約 3,000 石・忍藩約 3,300 石・六浦藩約 1,100 石・旗本 19 家約 2,300 石）
- ・寺社領 約 110 石

## ○伊奈氏の出自

・伊奈氏の姓は、信濃国伊奈谷の「伊奈」に因むといわれている。  
伊奈氏は清和源氏八幡太郎義家の流れをくむ藤原秀郷（俵藤太）の後裔とする。

## ○伊奈氏の系譜



(数字は初代から改易主での代)

## ○伊奈氏の業績

### (1) 灌溉・治水事業

- \* 1 将軍足利義尚より信濃国伊奈郡を与えられる。
- \* 2 伊奈姓を名乗り、三河国に居す。
- \* 3 三河で家康の父松平広忠に仕え、三河国幡豆郡小島の城主となる。
- \* 4 一五七二年、三方ヶ原の合戦での功により家康の康の字を賜る。その後長篠の戦い等で苦難の道をたどる。
- \* 5 初代備前守忠次は三河より家康とともに関東へ入国し、鳴巣・小室（伊奈町）に陣屋を構え一万石を供される。

(墓) 鴻巣勝願寺

\* 6

二代筑後守忠政は小室陣屋にて父のあとを継ぎ、大阪冬の陣で難攻不落を誇る大阪城の一つの支えである長柄川の流路を北方に変え、徳川方を優位に導き功をあげる。

(墓) 鴻巣勝願寺

\* 7

三代伊奈半十郎忠治は関東代官の頭取・関東郡代の要職まで登りつめる（初代関東郡代）。自身の右高は七千石余りだが、その支配地は数十万石にも及んだ。

(墓) 鴻巣勝願寺

\* 8

十一代忠尊は多大な業績を残した反面、家督相続騒動の中にあって、幕府の手により嘗々蟄居・知行没収・赤山陣屋の取り壱しを受け、百六十三年間続いた関東郡代伊奈家は改易となる。

しかし伊奈家は直参旗本として存続し、武藏国秩父と常陸国の一千石で幕末まで続いた。

● 利根川の東遷改修事業

第一次東遷（文禄三・一五九四）

川俣で分流→浅間川→庄内古川

第二次東遷（元和七・一六二二）

川俣→新川通り→權現堂川→

庄内古川

第三次東遷（元和七以後）

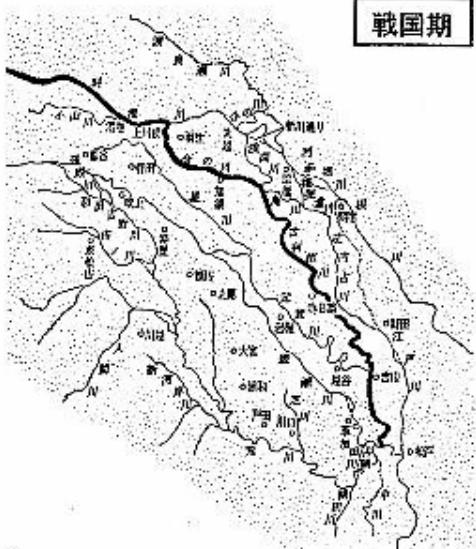
川俣→新川通り→赤堀川→関宿

→銚子

第四次改修（寛永十二～十八・  
一六三五～四一）

関宿→現江戸川

戦国期



第一次東遷



第二次東遷



第三次・四次東遷



この工事の完成により流れは東に  
向けられ、大宮台地の東に広がる  
越谷を含む中川低地は洪水の被害  
から解放されて、広大な土地が新  
田開発され、穀倉地帯に生まれ変  
わった。

## ● 荒川の西遷改修事業

・ 寛永六年（一六二九）熊谷の久下で現元荒川を閉切り、新たに水路を開削し入間川の支流へと合流させた（現荒川）。この事業により、沼沢地で不毛の地であつた元荒川・綾瀬川流域は、開発可能な台地へと変貌した。

・ この工事の完成により、特に越ヶ谷領出羽地区の新田開発が急速に促進された。（伊奈家の家臣である会田七左衛門による新田開発は今でも「七左町」の名を残す。）

● 瓦曾根溜井造成 慶長期（一五九六～一六一五）

● 見沼溜井造成 寛永六（一六二九）助太夫（会田出羽家？）

● びわ溜井造成 万治三（一六六〇）

● 葛西用水開削 万治三（一六六〇）

・ 中山道・奥州道に伝馬継ぎ立場を設け、また千住大橋を架設するなど往還道の整備を積極的に行つた。

### （3）幕府財政の再建

・ 治水・利水事業を進める一方、関東地方の検地を積極的に推進して土地政策を確立し、家康の関東領国經營に貢献した。

### （4）災害救済活動

・ 富士山大噴火（宝永四年・一七〇七）の際、七代忠順は被害の激しかった御殿場地区を中心に、救済のため米蔵を開放し大量の米を放出した。後に農民は忠順を神のようにあがめ「伊奈神社」を建てた。（忠順の活躍を描く、新田次郎著「怒る富士」）

## ● 浅間山代噴火（天明三年・一七八三）に端を発する天明の大飢饉に十二代忠尊は、江戸市民救済のため大量の米

を江戸市中に放出した。これらにより「伊奈半左衛門、世上の沙汰宜しく、町民とも唯伏いたす」と云われる。

## ● 赤山陣屋（赤山城）

・ 赤山陣屋は、寛永六（一六二九）関東郡代三代伊奈忠治が江戸幕府の直轄地を治めるためその任地に設けた役所。

・ 陣屋の構えは本丸・二丸・出丸・曲輪・社寺など約二万四千坪からなり、北・西側は二重堀で外堀には水があり、内堀は空堀で土塁がきずかれていた。

・ 家臣団屋敷が東・南・西側にあり元文四（一七三九）には百五十二人を抱えていた。屋敷の規模は一町前後のものが多く、門番屋敷などもあった。

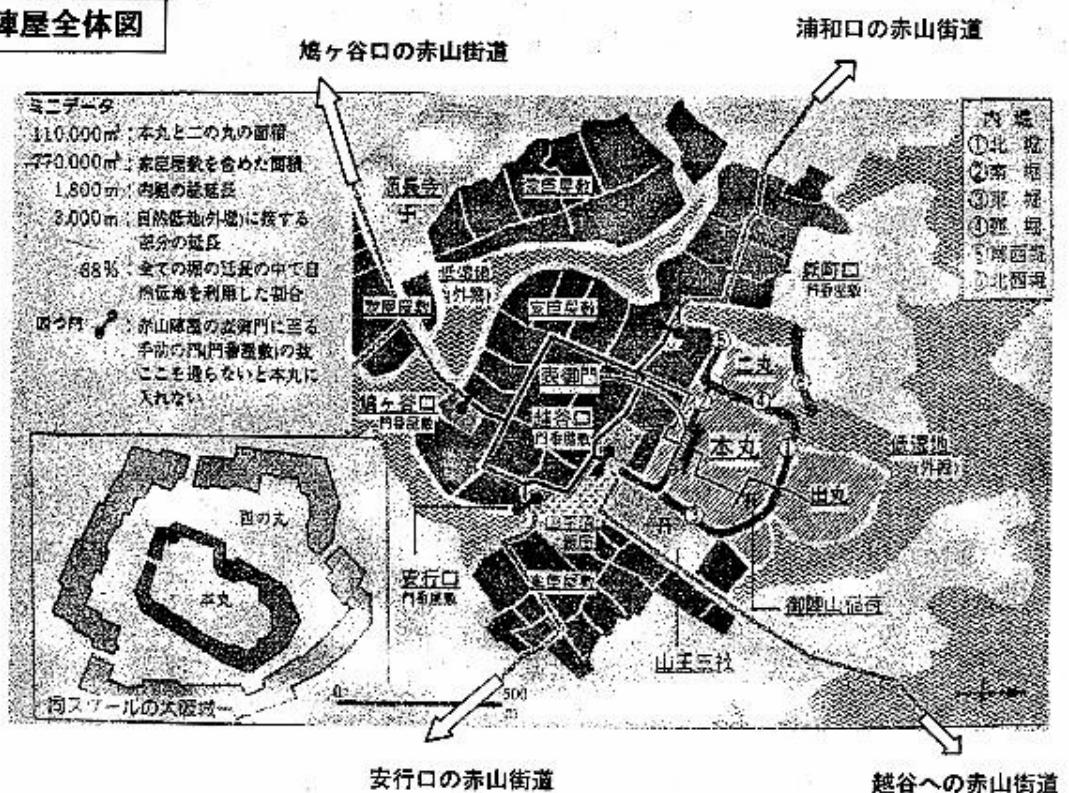
・ 陣屋の内外の道路は丁字路で直角に曲がっているものが多く、あたかも小さな城下町のようであった。

・ 社寺には山王三社（山王社・八幡社・天神社）と伊奈家の菩提寺（源長寺）があつた。

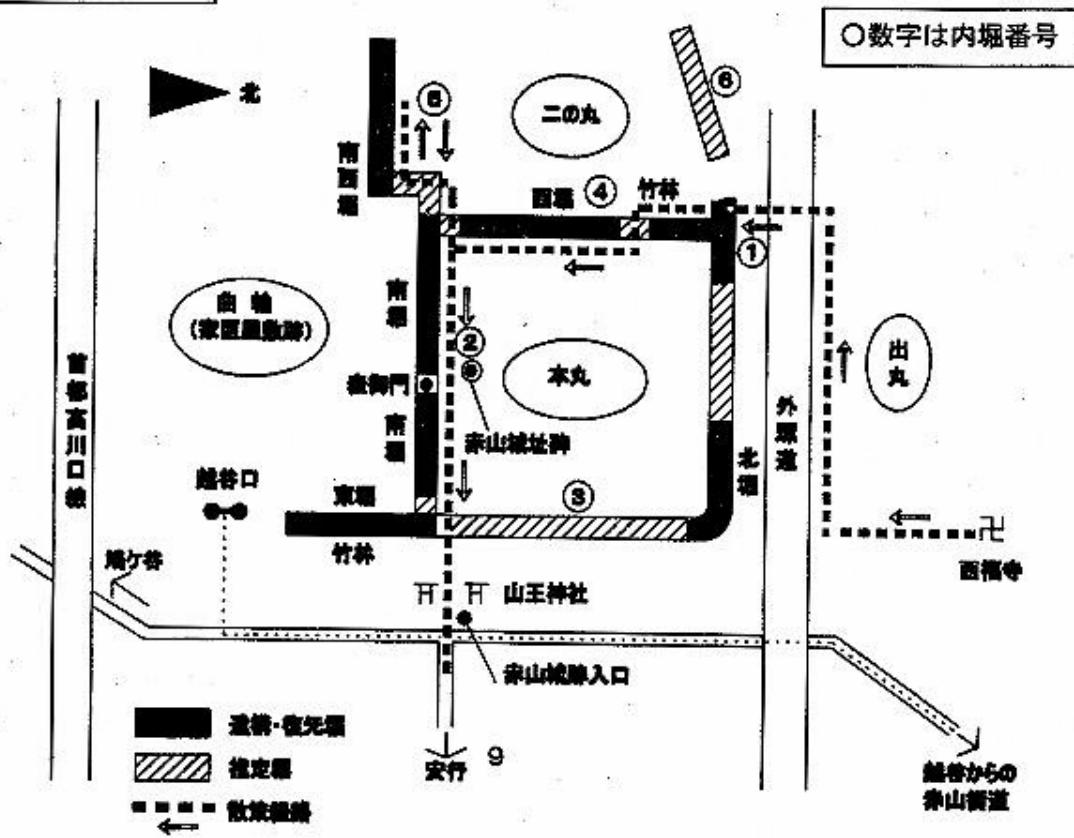
・ 寛政四年（一七九二）、伊奈家は十二代忠尊の時、幕府政治の変化と家中の騒動がもとで改易され、赤山陣屋も廃止された。

・ このため陣屋の建物や家臣団屋敷は取り壊されて畠地となり、今は空堀と社寺を残すのみである。

## 陣屋全体図



## 陣屋内案内図



## ● 興禪院

### ○興禪院

・曹洞宗に属し、山号を瑞龍山<sup>すりゆうざん</sup>と号する。玉龍山法性寺（鳩ヶ谷）の末寺で今から約四百六十年前、天文十五年（一五四六）に法性寺四世助天當益大和尚によつて開山された。開基は特定されていないので複数の人であろうといわれている。

・寛永六年（一六二九）関東郡代伊奈氏が赤山に陣屋を構えると、重臣富田氏が大檀那となり寺門

の興隆に尽くしたので、中興の開基とされている。



本堂

### ○富田家の墓

・伊奈氏の付家老といわれ、河川の改修や新田開発に大いに活躍し、赤山陣屋の二の丸に屋敷を構える。興禪院の大檀那として寺の興隆に尽くされ中興開基となつていて。

・伊奈氏が改易されると、知行地を削られ秩父に移され、明治に入つて宗門から離れ、線香が途絶えるに忍ばず、当山が菩提供養している。

### ○弁財天とふきだしと伝説

・赤芝新田が沼地である<sup>アマダツ</sup>沼を切りをして

いました。すると水面に小さな蛇が現れて、釣り糸のウキにじゃれつきました。しぶかくして糸から竿を抜いて竿を持つ親指をなめはじめました。

薄氣味悪くなり、小力を抜いて蛇を切り落としたところ、蛇はそのまま水中に流れて消えました。

翌朝気にかかり沼まで行ってみると、沼の水は赤く染まり、水面に死んだ大蛇が浮かんでいました。

大蛇を引き上げ切り刻むと、なんと頭三頭分の弁財天になりました。

のちに藤田某なる男の腰袋裏の中から大蛇の頭蓋骨が掘り出され、それを認めたのが安行領家の弁財天であることを伝えられている。

### ○抱き地蔵とスタジイの木



地蔵を抱くスタジイの木の根元

・墓地内にスタジイの巨木が5本ある。県指定ではないが元禄年間の石のお地蔵様を根元に抱きかかえた巨木は迫力がある。

・スタジイとツブラジイを合せてシイノキとよんでいる。秋にはドングリがなり、甘みがあつてなかなかうまい。昔の人はこれを食用として重宝した。

こんこうじ

## 金剛寺

### ○金剛寺

- ・曹洞宗に属し、山号を富雙山ふそうさんと号する。今から約五百十年前明治五年（一四九六）に領主中田安斎安行を開基とし入間郡越生町の本寺関三刹龍穏寺第七世節庵良筠禪師によつて開山され、僧侶修行道場を持つていた。

- ・寺名は、中田安斎安行が金剛經を信奉していたことに由来している。またこの人の名をもつて「安行」の地名の由来になつたという。

・寛永十九年（一六四二）三代將軍家光公から一〇石の御朱印を賜る。

- ・参道は紅葉の名所として名高く、現在お灸の寺として知られ、2・3・7・8の付く日は灸治療日となつてゐる。一回千円。

### ○山門

- ・珍しい茅葺きの山門。

- ・山門は約四百年前に構築されたもの。桃山様式を取り入れた四足門で、市内最古の棟門である。



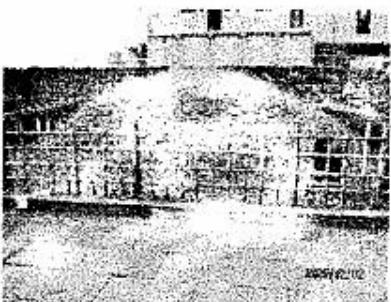
山門



本堂

### ○経塚

- ・仏教經典を後世に残し、また極樂往生・現世利益を願つて、經典・經石などを埋めた塚。
- ・平安時代に始り、鎌倉・室町時代に盛行し江戸時代まで続いた。
- ・最も古い經塚は藤原道長が寛弘四年（一〇〇七）吉野金峯山に造立したもの。



経塚

### ○安行植木の祖 吉田權之丞の墓

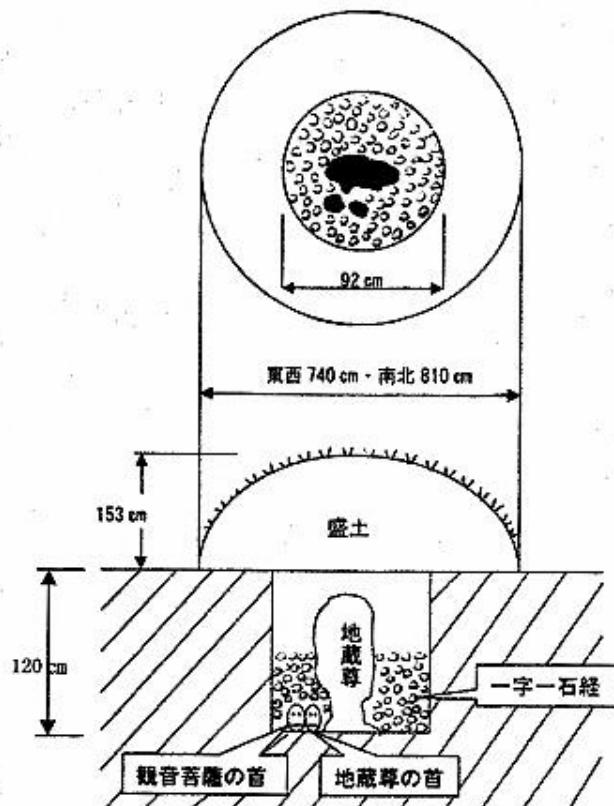
- ・安行の植木は吉田權之丞によつて始められたと言われる。

- ・安行の名主役で、若い頃から草花や盆栽に興味を持ち、珍しい草木を集めでは栽培していたという。

- ・明暦の大戦（一六五五）の後、植木や草花等を江戸に送つたところ、人々に喜ばれたことから、付近の者も見習い苗木を作りはじめ、今日の植木産地としての隆盛を見るにいたつた。

- ・今でも子孫の吉田家は、「花屋」の屋号を代々受け継いでいる。

○ 経塚の発掘調査（平成四年）



・ 経塚の中央の巾92cm×120cmの同筒状の中には、背面に碑文が刻まれ、首を打ち欠かれた地蔵尊が北向きに据えられ、足元にはその首とともに觀音菩薩の首も埋納されていた。又その周囲には金剛般若經の経文を記した4,892個の一字一石経のほか、銅製の仏具片やガラス玉なども検出された。

・ この地蔵尊の背文には、正徳二年（一七一二）に建てたと記されているが、開基の中田氏によつて築造されたものを、あらためて一字一石経等を埋納し修復したとある。

## 花と緑の振興センター

○ 当センターは、現在地に昭和二十七年に設置された「植物見本園」を前身として、昭和五十七年に植物検査所を合併して「植物振興センター」となり、本県特産の花・植木・果樹苗木の生産振興を図るための、生産出荷技術並びに環境緑化の指導に加え、時代の要求に応じた情報提供等のサービス向上を目指して、平成十五年に「花と緑の振興センター」となった。

- 敷地面積は約二、三ヘクタールの中に本館建物と植木を中心とした六〇〇種二〇〇〇品種にのぼる植物を展示している。主なものはツツジ類、ツバキ、ウメ、カエデなど多くの品種を収集し植栽展示している他、コニファー類、花木類などの新しい品種も展示している。
- また、花、植木等の生産者等を対象とした各種の研修や、県民だれでも参加できる講座を行つているほか、植物やその栽培管理などに関する相談や情報提供も行つている。
- 見学時間は、四月から九月までは午前九時から、四時三十分まで、十月から三月までは午前九時から午後四時まで、休園日は十二月二十九日から、翌年一月三日まで。

## 源長寺

### ○源長寺

・淨土宗に属し、山号を周光山と号し、院号を勝林院と称す。本尊阿弥陀如来像。

・今から約三百九十年前元和四年（一六一八）伊奈半左衛門忠次公が居城に近い赤山の地にあつた古寺を再興して伊奈家の菩提寺として創建し、両親の菩提寺である鴻巣勝願寺の円誉上人を開山として迎えた。

・二代住職日誉上人は忠次の弟で、病により出家して当寺に住まし後に、勝願寺の六世となり、さらに鎌倉の大本山光明寺の住職となり、ついには京都知恩院の法王となつた人である。  
・赤山陣屋が存続した間は伊奈氏の菩提寺として（四代忠克以後の代々の墓がある）隆盛を極めたが、十代忠尊の改易により、衰微する伊奈家と運命を共にし、余儀なく荒廃する時期が長く続かざるをえなかつた。



本堂



4代忠克以後の代々の墓

## ○伊奈頌達碑

・五代忠常が、寛文十三年（一六七三）に建立。文章は江戸時代初期の儒学者林羅山の子の林道甫。

・碑文は、初代忠次から四代忠克までの業績が漢文体で記されている。

・伊奈氏の嫡祖忠次が清和源氏の末裔であることから始り、様々な開拓を行つた事や、多摩川の水を江戸城に引き入れた事など伊奈家の功績を物語つてゐる。

### ○涅槃釈迦像

・陰曆二月十五日（現三月十五日）は涅槃（釈迦の死）会、お釈迦様が八十歳の生涯を終えられた日。

・八十歳になつてお釈迦様は余命のないことを知り、故郷忘れ難く、北の方生れ故郷を目指して歩みを続けたが、力つきで沙羅の樹の下に、頭を北に、右手を枕に、両足を重ねて横になつたが、ついに帰らぬものとなつた。

・この涅槃像の作法を取り入れたのが、死人の北枕である。



涅槃釈迦像

主な参考資料

- ・平成九年 地土研究会史跡めぐり資料
- ・平成十七年 小澤正弘氏講演会資料
- ・川口市史「通史編」上巻
- ・赤山陣屋内説明解説板
- ・各寺社由緒書
- ・川口市諸パンフレット類